



絵画を活用した防災

— 1945年三河地震を事例とした地域防災教育の試み—

Development of the Pictorial Description Method for
Disaster Education of the General Citizens

林 能成・木村 玲欧 (名古屋大学)

HAYASHI Yoshinari, KIMURA Reo (Nagoya University)

We developed the method of converting the victims' past experiences into the educational materials for the development of disaster-awareness in the society. This method consists of the following 4 steps; ¹ conducting semi-structured interviews with victims of past major disasters, ² reconstructing the episodes to reproduce the image of 'damage', 'Victims behavior in the process of life recovery from the disaster', 'Received support from the community and administration', ³ picturizing these episodes by professional artists, ⁴ making educational material combining the information about hazard and the extent of damage about the relevant disaster with the pictures of episodes. We applied this method to the 1945 Mikawa Earthquake, Japan, which caused more than 2300 casualties, conducted 20 interviews and produced educational materials including 130 pictures.

1 はじめに

日本では大きな自然災害が繰り返し発生し、多くの人命が失われてきた。中でも地震は前ぶれもなく発生し、揺れによる建物の倒壊といった直接的被害に加え、津波や火災といった二次的な災害でも大きな被害が発生する。そのため、さまざまな被害を想定した不断の備えが必要不可欠である。

図1は明治以降に発生した日本の地震災害による死者数である。最大の死者数を数えた地震はよく知られるように1923年(大正12年)の関東大震災である。この地震では地震の揺れによる建物倒壊といった直接的な被害に加え、大規模な火災が発生したことにより10万人を超える方が亡くなっている。次いで、1896年(明治29年)に発生した

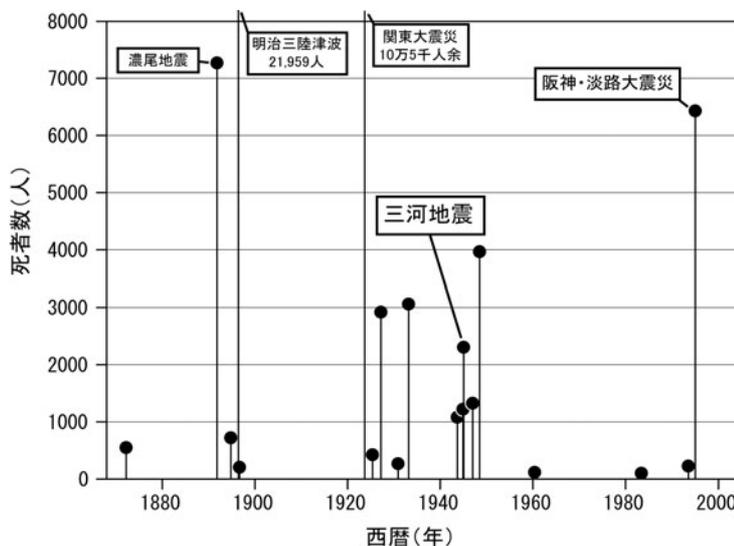


図1：明治時代以降の日本の地震災害による死者数

明治三陸地震津波があげられる。非常に弱い揺れの地震動で、最大でも震度3程度であったにもかかわらず、その後、突如大きな津波が襲うという特異な地震であった。津波高さは最大で38.2m（岩手県大船渡市三陸町綾里）に達し、三陸地方沿岸で2万人を越える死者が出た。1891年（明治24年）に起きたわが国最大級の内陸直下型地震である濃尾地震では、激しい地震動による家屋倒壊などで7273人の方が亡くなった。以上3つが明治時代以降のわが国における三大地震災害である。また、記憶に新しい1995年（平成7年）阪神・淡路大震災による死者は6433人で、これらに続く4番目に死者数が多かった地震災害と位置づけられる。

この図で注目すべきことは2つある。1つは阪神・淡路大震災の前には50年近く大きな地震災害が発生していないことである。そしてもう一つは、約50年前の1940年代には死者1000人を超える地震災害が5つも連続して発生したことである。この5つの地震は、1943年（昭和18年）鳥取地震、1944年（昭和19年）東南海地震、1945年（昭和20年）三河地震、1946年（昭和21年）南海地震、1948年（昭和23年）福井地震で、戦中戦後の混乱期に発生したため、被災記録が体系だつてとられていなかったり、記録が散逸してしまったものも多い。特に1944年（昭和19年）東南海地震と1945年（昭和20年）三河地震は、ほとんど記録が残っていない。敗戦色が濃厚となった時期に軍需産業が集中する東海地方を襲った地震であったため、戦時報道管制によって被害の報道にも厳しい規制がかけられたためである。また、地震後も被災地では空襲が続き、終戦後は社会的な混乱も重なり、多くの記録が失われてしまった。この2つの地震は「隠された大地震・津波」（山下、1986）とも呼ばれている。

この1940年代の5つの震災は、今ならば被災者は存命であり、当時の話を直接伺うことが可能である。このことは、もはや文献資料でしか調査ができない明治・大正時代の震災との決定的な違いである。そこで、我々は地元・愛知県に大きな被害をもたらした1945年（昭和20年）三河地震に注目して、被災者へのインタビュー調査を進めてきた。

2 過去の地震災害を調査する意義

この三河地震の調査には2つの意味があると考えている。まず1つ目は阪神・淡路大震災の被災体験を相対化することである。現在、国や地方自治体、企業、学校など様々なレベルで防災対策が進められているが、これらの防災対策は10年前に起きた阪神・淡路大震災が転換点になっている。阪神・淡路大震災は、高度に発展した日本の現代都市において初めて発生した都市型巨大災害である。家屋の倒壊、火災の発生、鉄道など輸送路の途絶、避難生活における混乱、住まいや暮らしの再建の難しさなど震災の持つ複雑さや多様性を多くの市民に知らしめることとなっ

た。しかし、この震災で起こった出来事に備えれば、地震対策は万全なのだろうか。災害は「外力」と「社会の防災力」との大小関係・相互作用によってその規模や特徴が決まる。ここで重要なのは「外力」の強弱だけでは災害の様相は決まらないことである。同じ大きさの地震の揺れに襲われても、地震が襲った地域の社会環境が違えば災害の様相は一変するし、被害は大きくもなれば小さくもなる。阪神・淡路大震災から10年がたち、被災地においても携帯電話の普及や高齢化の進展など、もはやあの時と同じ社会環境ではない。いわんや他地域においてはである。つまり阪神・淡路大震災と同じ災害は二度とおこらない。社会環境の違いを踏まえて、過去の災害教訓を捉えなおすという作業が重要になってくる。

もう1つのこの調査の特徴は、地域密着という視点である。関西に居を構える人にとっては、阪神・淡路大震災は身近なものとして実感することができる。しかし我々が住む名古屋周辺では「あれは遠い神戸のできごと」と考える地域住民も少なくない。災害を身近に感じるためには、地元における災害事例をもとに災害を「わがこと」としてとらえ、防災対策へと昇華させていく必要があるようだ。しかし阪神・淡路大震災以外の震災においては、関東大震災などごく一部を除いて系統的な災害の教訓はほとんど残されていない。

3 歴史から葬りさられた震災 1945年三河地震

三河地震が発生したのは、1945年（昭和20年）1月13日午前3時38分である。地震の規模を示すマグニチュードは6.8で、これは地震学的には特別大きな地震ではない。しかし飯田汲事・名古屋大名誉教授の後の調査で明らかになった2306人という死者数は明治時代以降の地震災害で8番目に多い死者数であり、まさに大災害である。ところがこの災害の大きさは、当時は報道されなかった。例えば地震翌日の朝日新聞には「昨払暁、東海近畿方面に地震 愛知県下被害は僅少」とあるだけである。

この三河地震ではごく狭い範囲に激しい被害がもたらされた。多数の犠牲者が出たのは、現在の愛知県安城市、西尾市、蒲郡市の一部など20km × 15km四方程度の狭い範囲の町村に限られる（図2）。これは1995年兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）や1948年福井地震などと共通した、いわゆる直下型地震に共通する被害の特徴である。人々が生活を営む地面の真下で活断層が動き強烈な地震波が放出されるため、断層に近いところでは非常に激しいゆれとなる。そのため一部の集落では家屋全壊率が90%以上という甚大な被害に見舞われた。たとえば桜井村藤井集落（現、安城市藤井町）では全117戸中90%以上の107戸が全壊し、全人口611人中77人が死亡している。

さらにこの地域では、わずか1ヶ月ばかりの間に、2度連続して大きな地震に襲われた。三

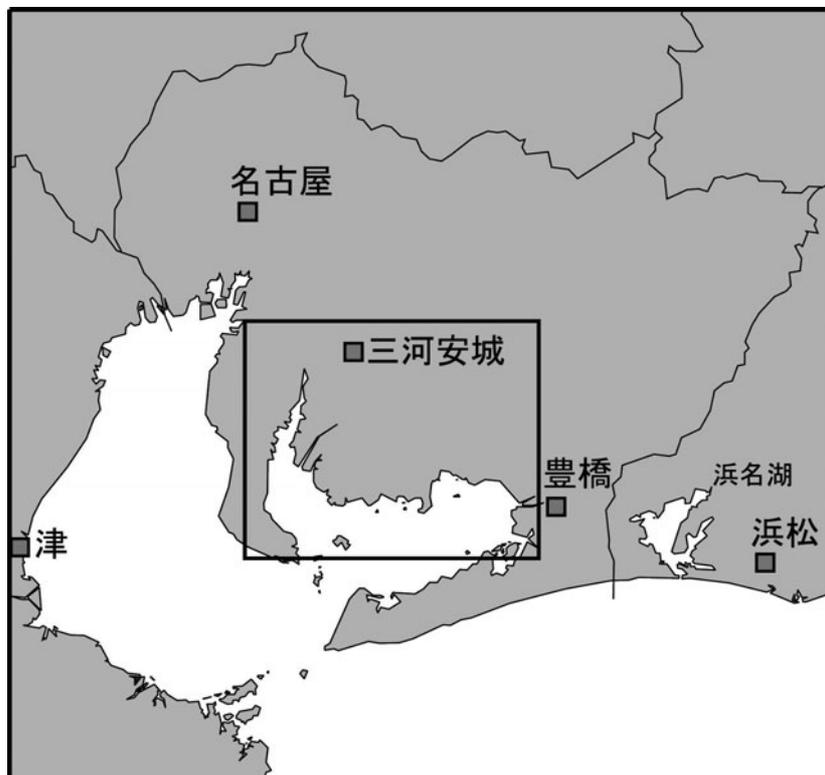
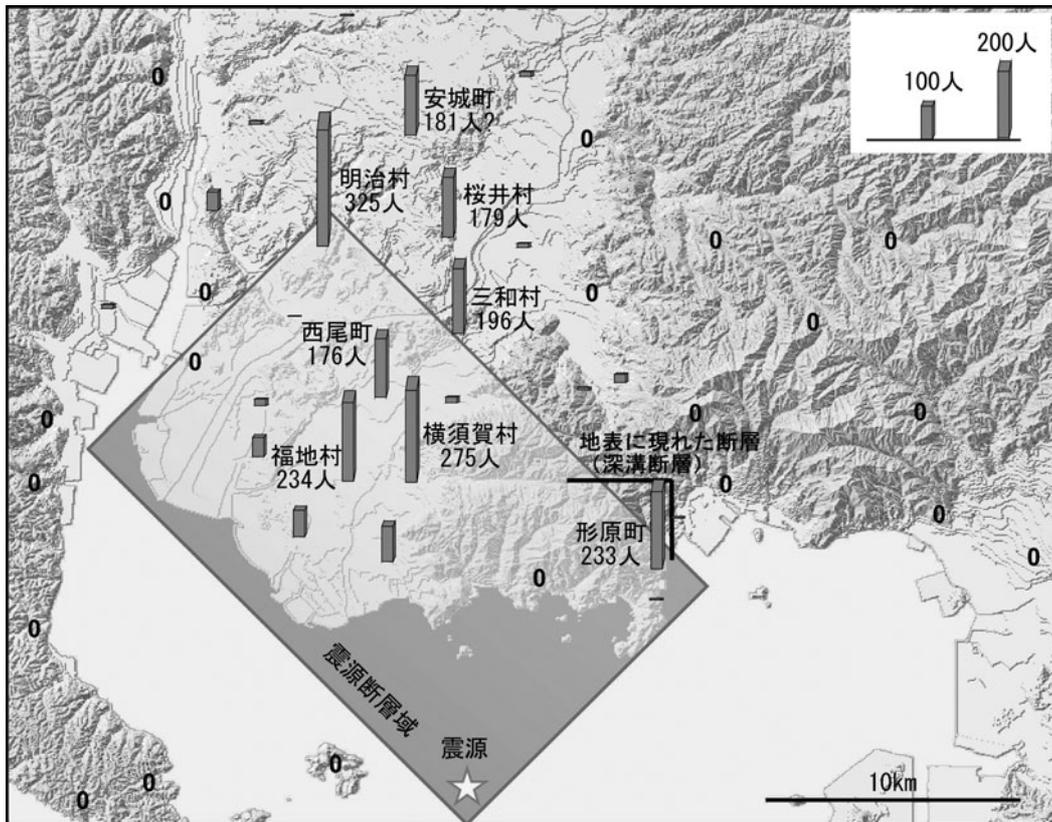


図2：三河地震の市町村毎の死者数
概略地図の中のワケは詳細図の範囲を示す。

河地震の37日前の1944年（昭和19年）12月7日には紀伊半島沖を震源域とする東南海地震が発生しており、静岡県・愛知県・三重県を中心に1200名以上の死者を出す大災害になっていた。愛知県三河地方でも震度6、場所によっては震度7の揺れがあった。この地震によって家屋が損傷し、復旧作業が遅れているところに、三河地震に襲われて全壊してしまった家も多かった。

この地震について、戦後40年近くたった1970年代から80年代に、飯田汲事、山下文男、中日新聞社会部、蒲郡市教育委員会などによる被害調査が精力的に進められた。しかし地震後の対応の様子など未だ不明な点も多く、数多くの謎が残されている。

4 いかにもイメージしてもらおうか

災害の全貌を明らかにするためには、地表に現れた地震断層の様子や建物被害の様子といった物質的な事柄のみならず、被災者の意識・行動や行政等による支援の様子といった人間心理や社会制度なども重要な調査項目である。そこで、被災者へのインタビューでは、¹ 家族・集落にどのような被害があったか、² 地震が起きてから時間を追ってどのような意識をもち・行動したか、³ どのような人・組織に助けられたか、という3点を重点的に聞いている。

被災体験の見せ方にも工夫をした。せっかくインタビューを行っても、その成果を文字で残すだけでは、子供たちをはじめ、地震にあまり縁がない多くの市民には興味を持ってもらえない。そこで被害状況や災害対応の様子を絵で再現することを考えた。これは、当時の社会情勢から被害写真がほとんど残っていないために考え出した苦肉の策であったが、写真には残せない知見・教訓や、被災直後は残そうと思わない出来事までも画像で表現できる効果をもたらした。

体験談だけから絵を描くことは難しく、絵の作成には災害に関する知識や、第二次世界大戦中の生活についての知識も欠かせない。このような画家を見つけられるかでこの計画の成否が決まると考えていたが、幸いなことに愛知県立芸術大学非常勤講師もされている阪野智啓さんと藤田哲也さんという二人の若手日本画家がこの試みに協力し



図3：インタビュー調査の様子
（左から、林、画家の藤田哲也さん、被災者の小沢正彦さん）

てくれることとなった。二人は院展をはじめ多くの公募展で入選する実力を持つばかりでなく、歴史や文化にも幅広い知識と興味を持っており、余人を持って変えがたい存在である。

実際の絵の作成には次のような手順を踏んでいる。まず、インタビューでは画家の方も必ず同席して被災者の話を聞きながらラフスケッチを書いてもらう（図3）。生の声を聞き、被災者の人となりを感じることによって被災体験のイメージを共有するためである。その後、我々と画家が相談して絵に残すべきシーンや教訓を選び、必要な資料なども探して絵を描くこととなる。そして完成させた絵を持ってもう一度インタビューに行き、記憶と異なる点などを指摘してもらって修正または書き直しを行う。このような手続きを経ることで絵の完成度を高められるばかりでなく、被災者の60年前の記憶がより鮮明になり、記憶の奥底にしまわれていた体験が聞ける場合も多い。

5 集められた体験談

現在（2006年12月）までに20件の正式インタビューを行い、130枚を超える絵が完成した。



図4：隣組総出で母の救出を手伝ってもらった
(岩瀬繁松さんの体験談を元に作成，藤田哲也画)

紙面も限られているため、ここではその中から救助・救出に焦点をしばって体験談と絵を紹介したい。

碧海郡明治村城ヶ入集落（現在の愛知県安城市城ヶ入町）の岩瀬繁松さんは当時17歳で、お母さんと二人暮らしだった。自分自身は家が倒れる衝撃で庭のもみがらの上に放り出されたが、後をついてきた母親は倒れた家の中に生き埋めになってしまった。このような事態においては、隣近所の人々の協力が欠かせない。隣組で下敷きになった人は他にいなくみな無事だったので、総出で母の救出を手伝ってもらうことができた（図4）。しかし、母は梁の直撃を受けて亡くなっていた。

隣の明治村根崎集落（現在の愛知県安城市根崎町）に住んでいた岡田菊雄さん（当時12歳）の家では、2階建ての家の1階部分がつぶれてしまった。本人は1階に居たため家の中に閉じこめられてしまった。冬の午前4時前に発生した地震であったため、周囲は真っ暗だったが、たまたま壁がはがれ落ちて外の星空の光が家の中に差し込んでいた。そこでそばで泣きわめいている妹を抱きかかえて、かすかに遠くに見える星空を頼りに家から外に脱出することができた（図5）。

明治村和泉集落（現在の愛知県安城市和泉町）の早川ミサコさん（当時15歳）は、母屋で寝



図5：妹を抱きかかえて、かすかに見える星空を頼りに自力で外に脱出した
（岡田菊雄さんの体験談を元に作成，阪野智啓画）



図6：朝になって海軍の兵隊によって助けだされた（早川ミサコさんの体験談を元に作成，阪野智啓画）

ているときに地震に襲われた。わけがわからないうちに家が倒れて、ミサコさんが上、隣に寝ていたおばあさんが下で折り重なるような状態で鴨居の下敷きになってしまった。おばあさんはそのまま亡くなったが、ミサコさんは朝になって集落に隣接していた海軍・明治航空基地の兵隊によって助けだされた（図6）。

原田三郎さんは当時25歳、東京で近衛兵をしていたが、明治村西端集落（現在の愛知県碧南市湖西町）の実家に帰省していたところを三河地震に襲われた。軍人である原田さんは枕元に服や靴を準備して寝ており、自宅は倒壊したが、自力で外にでることができた。外に出たところ、「助けてくれ」という小さな声が足もとから聞こえてきた。ふと見ると、隣のおばあさんが崩れた家の下敷きになっていた。そこで必死になって瓦をはがして救出した。道具がなく素手で行うしかなかった（図7）。

碧海郡櫻井村藤井集落（現在の愛知県安城市藤井町）で被災した富田達躬さん（当時16歳）の体験は壮絶である。隣の家で火が発生し、梁に足を挟まれた女学生が家の中に取り残されてしまったのである。彼女は「助けてくれ」と必死で叫び続けていたが、富田さんの家も含め周囲の家は全て全壊し、どこの家も自分の家のことで精一杯だった。結局、誰も助けてあげることはできず、女学生の声は次第に小さくなっていき、じきに消えてしまった（図8）。その声は60年



図7:隣のおばあさんが生き埋めになり、素手で瓦をはがして救出した (原田三郎さんの体験談を元に作成, 阪野智啓画)



図8:隣の家で火事が発生し中で女学生が助けを求めていたが自分の家のことで精一杯で助けることはできなかった (富田達躬さんの体験談を元に作成, 藤田哲也画)

たった今でも忘れられないという。

これらの体験談から、救助・救出の実態をまとめることができる。岩瀬繁松さんは、隣組の家が無被害だったために総出で母親の救助をおこなうことができた。共助の力が発揮された例だと考えられる。岡田菊雄さんは、壁がはがれ落ちたために逃げる方向がわかり、光も差し込んできたために外に出ることができた。岡田さんは「幸運だった」と言っているが、自力（自助）によって脱出をした一例である。早川ミサコさんは、近くの軍隊が災害対応従事者となり、効果的な災害対応をしてくれた。公的機関（公助）によって助けだされた例である。さらに富田達躬さんの経験では、自分の家も周りも甚大な被害に見舞われていた。富田さんの集落ではどの家でも死者が出ている状態で、富田さんの家でも2人の方が亡くなった。このような状態のときには、もはや共助というものは全く使えないことが容易に想像できる。

6 事例から浮かびあがってきた教訓

阪神・淡路大震災の教訓では「救助・救出には自助と共助が大切である。大都市ではないところは共助が生きているから、阪神地区でなかったならば共助がもっと有効に働いて救助・救出できたのではないか」と考えられていた。しかし、1945年の三河地震発生当時は農村部だった明治村・櫻井村周辺の被災像を集めてみると、共助に過大な期待を持つことはできないことがわかってきた。大きな被害を受けてしまった地域では、当然のことながら自助が基本になる。現代の社会に置き換えるならば、例えば、家の耐震補強、家具の転倒防止などによって「下敷きにならない」工夫をしておくことが第一に重要である。そして、自分がすぐ外に逃げられるように、日頃から靴やあかりを備えておくという「自助努力による備え」が大きな意味を持っている。

さらに、素手でしか救助・救出できないような事態にならないように、救助・救出に必要な資機材を地域や各家庭で事前に整えることも重要である。車の中や庭の物置などといった、家がつぶれたとしても容易に取り出せるような場所に備えておくことが効果的だと考えられる。原田三郎さんは「道具がなく素手で救出したのは戦争中で物がなかったからだ」と述べているが、今、地震が起こったときに、果たして自分の身の回りで助け出すことができるような資機材が十分備えられているのかは大きな疑問である。60年前の戦争中の教訓が、今なおいきている好例である。

7 おわりに

インタビュー調査は現在も継続しており、今回紹介した事例以外にもさまざまな教訓が得られ

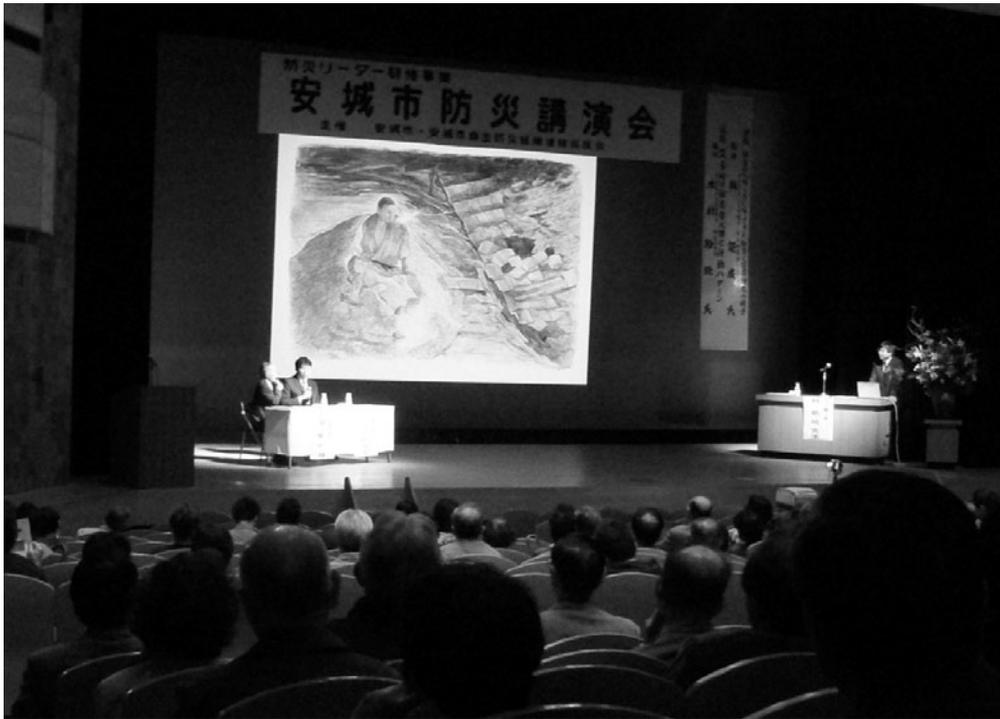


図9：対談形式の講演

ている。インタビューをした方の中には、町内会や小学校などで、自らの体験談を元に今回作成された絵を使って震災を語ってくれた人もいと聞いている。災害教訓の世代間伝承に、この絵が使われているのはうれしい限りである。また我々も地元自治体と協力して「被災者と研究者が壇上で対話することによって、聴衆者である地域住民の災害イメージをふくらませる」講演会などを開催している（図9）。今後は他の震災・災害にも調査対象を広げて、災害対策に備える教材の整備を進めていきたいと考えている。